

# おんげん

オークン (ありがとう)

NPO 法人カンボジアの子供の人権を考える会 会報

第 22 号 2017年 8月15日 発行

発行者 : The SCCCR日本事務所

〒270-1602 千葉県印西市松虫 516 いんば学舎内

Tel.0476-98-2486 e-mail: t.kikuchi0127@gmail.com



この時期、2月下旬から7月下旬までは、プノンペンと成田の往復が忙しい時期です。障害者福祉施設を運営する日本での仕事関係の用事が短期間に複数回あり、往復せざるを得ないのです。

今回は7月18日のANA便で来日し、8月1日の便でカンボジアに帰国するという短期間の日本滞在でした。

梅雨末期の日本は、九州・東北・北海道の豪雨による大きな被害が報じられました。私の住む関東・千葉は空梅雨で。しかし、梅雨明けを宣言して以後、曇り空、雨模様の日が続きました。一方雨季のカンボジア、プノンペンはどこらかというと雨が少ないのですが、北の地方では田んぼが洪水級に水で覆われる被害が出ているそうです。地方・地域によって雨の降り方、被害の様子が極端に違うのはどこも同じ。局地的にドット降るのは世界傾向なのでしょう。

本号は、9月16日(土)開催のカンボジア孤児院「希望の家支援 高木早苗チャリティコンサート」宣伝号です。又、21号で掲載できなかった、私の福祉法人施設「いんば学舎・草深」で働く：高林義勝君のカンボジア日記を掲載します。

(事務局・菊地)

## <ご挨拶> チャリティコンサートに寄せて

本日は、「希望の家」支援チャリティーコンサートに足をお運びいただき、ありがとうございます。

安定した衣食住に加え「教育」に力を注ぎ、世の中に役立つ人材を育てたい、という創業者・松永氏、菊地氏の思いに共感し、音楽で何かできないだろうか、と思い立って2008年から始めたこのコンサートが、今回で10回目を迎えます。多くの方にご支援・協力・応援いただいていることを、心より御礼申し上げます。そしてこのコンサートに共演くださった全ての方に、感謝しております。

子供達が「希望の家」の精神を受け継ぎ、それぞれの道を見つけ生き生きと歩んでいる姿に、勇気づけられています。日本で勉強、仕事をする子供達も増えてきました。カンボジアが経済的に発展してきているとはいえ、まだまだ支援を必要とする子供達があります。また、子供の緊急時にも、このチャリティーコンサートでの収益が役立ったと聞いています。

2008年に希望の家を訪問して以来まだ再訪が叶っていない中、毎年、子供達はじめ関係者・支援者の皆様にこのコンサートでお会いできることが喜びです。今日はピアノのソロ&連弾のコンサート。フレッシュな尾形祐香さんとの共演で、お楽しみください。そして報告会では、日本に留学中の子供達も交え、「希望の家」の様子をお伝えします。

今年も「希望の家」に思いを寄せながら、この午後のひとときを、皆様と過ごしたいと思っております。

<チャリティコンサート主宰者：高木 早苗>



Cambodia Phnom Penh  
「Home of Hope Center」



日時 2017年 9月16日 (土曜日)  
14:00~15:30

会場 いんば学舎・草深 ホール

住所 印西市草深字柿録 484-3 \*駐車場あり

電話 0476-48-6411

入場料 大人:1500円 中学生以下:500円

出演 高木 早苗 (ピアノ・コンサート主宰者)  
尾形 祐香 (ピアノ)

〜〜〜プログラム〜〜〜

■ 前半(40分)

ショパン:ノクターンOp48-1(高木)

ラヴェル:夜のギヤスパールより「オンディーヌ」(高木)

シューマン:幻想曲Op.17より第3楽章(尾形)

シューベルト:人生の嵐D947(逸伴)

■ 休憩(20分)

希望の家からのあいさつと報告

コーヒーチャリティ いんば学舎のパンなどの販売

■ 後半(30分)

グナナドス:ゴイエスカスより「嘆き、またはマハと夜鳴き

うぐいす」(尾形)

リスト:バラード第2番(高木)

ベートーヴェン:交響曲第七番より第1楽章(逸伴)



孤児院  
「希望の家」支援  
チャリティコンサート  
Vol. 10  
高木早苗&尾形祐香  
ピアノコンサート(連弾・ソロ)

問合せ コンサート事務局 e-mail:saabsam1201@yahoo.ne.jp (件名は「希望の家コンサート」とお書きください)  
「カンボジアの子供の人権を考える会」事務局(菊地) e-mail:t.kikuchi0127@gmail.com 0476-98-2486



## カンボジア日記

高林 義勝 (いんば学舎)

3月に研修名目でカンボジアに行ってきた。首都プノンペンまで6時間。最近就航したANAの直行便があるので楽なものだ。

空港から歩いて菊地さん宅に向かい、先発の嶋津さんと合流。夕方、プロ君も一緒に近所の屋台でクイティユ (鶏ガラだしのソバみたいなもの)、ミージャ (焼きそば) を食べる。周囲の喧騒とご飯の脂っこさに久しぶりのカンボジアを実感する。隣の「アップルマート」で食材等を買って帰る。

しばらくするとキムリン (チャリヤの妹)、パニーの2人が学校から帰ってきた。キムリンは少し明るくなったかな。パニーは初めて見る。元気そうな女の子だ。

私のアパートの住人6名。8月1日(金)には、今度高校生になる菊地さんが、毎週8名分の夕食作りが、主人・菊地さんの記事です。



2日目。朝早くに菊地さん宅出発。菊地さん嶋津さんと3人自転車でブラザーの家へ。礼拝後、子供達の世話や掃除、洗濯をして過ごす。子供たちは皆変わっていない。ティー君、チャイ君は覚えていてくれた。チャイはカンボジアの航平君だ。背格好や顔の表情、人懐っこさがそっくりだ。ダウン症のシモン君は相変わらず素っ気ない。昼には菊地さん宅に戻ってご飯。焼きそばを作るが、うどんみたいになる。食後島津さんと希望の家へ。トゥクトゥク (三輪タクシー) に乗っていくが、一向に着く気配がない。しょうがないので近くの学校へ行ってもらいそこから歩いて行く。希望の家でパンニャーと他の小さい子数名と会ってすぐ収容所跡へ。現地までナレットさんに送ってもらい、音声ガイドを聞きながら4階建ての今

にも崩れ落ちそうな建物群を巡る。何百という数の顔写真があり、老若男女のカンボジア人がうつろな目で写っている。この中で生き残ったのは数名。技師と絵描きと大工だけ助かった。キリングフィールドも行ったがこちらの方がより心に来る。

トウリスレーン収容所跡の展示室。人の愚かさ、行いの恐ろしさ怖さを感じさせられる。今持て誰も裁かない所に、カンボジアの責任感の欠如が、よく表れます。



その後、リバーサイドに行き島津さんはマッサージ店へ。その間ナレットさんと近くのベンチに座って待っていた。ナレットさんは希望の家の施設長兼子供たちのお父さん役で、人柄も温和な立派な人だ。英語が通じるし日本語も結構分かる。

すぐ前をメコン川が流れ、白人、中国人、カンボジア人らが行き交う中、しばらくおしゃべりしていると、1人の老人が僕らと同じベンチに腰掛けた。クメール語でナレットさんに話し掛ける。僕について色々聞いてくるのでナレットさんを介して話をする。聞けば90才と言う。昔のカンボジアの話、シアヌーク王の賢人ぶり、ベトナム人の悪口、家族のこと、色んなことを話してくれた。

島津さんが出てきたので希望の家へ戻る。子供達も皆そろっていた。頭の回転が抜群に速く界限の人気者ピトゥー、真面目で優しく人懐っこいジェム、あか抜けていてクールなノンラック、チビのパンニャーはいっぱしに生意気になっていた。一番小さくてお兄ちゃんたちによくいじめられていたのが、新しく下に入ってきた子どもたち3人を従えて威張っている。スライロアは少しお姉さんに、キムランは随分大人っぽくなっていた。賄いのチャッドさんも元気だ。しばらく子供たちと遊んでから菊地さん宅に戻った。

3日目。早朝3時半にナレットさんの運転で、

ナカタさん、お母さんと子供たち、島津さんと総勢 20 人で海へ。ナカタさんはれっきとしたカンボジア人だが、サッカーが上手いのでそう呼ばれているらしい。本名は分からない。プロレスラーみたいにムキムキでいつも裸だが、気さくでとても優しい人だ。ナレットさんが皆のお父さんでナカタさんは親戚のおじさんという感じ。

希望の家の可愛い娘達と一緒に  
カンボジアの女性は水着を着  
ます。普段着、それが水着で  
シアヌークヴィルに毎週



4 時間ほどで着く。朝ご飯をビーチで食べてから皆一斉に海へ。水着を着る文化はないらしく普段着で入っていく。浜辺で焼いていたらカムリンが呼びに来る。その後も休もうとするたび呼びに来て、結局子供たちにずっと付き合わされた。たっぷり 2、3 時間は遊んでから昼食。食べ終わるとまたすぐ海へ。まあ皆元気。普段仏頂面のキムリンも楽しんでいた。

夜は菊地さん宅に戻って夕食。カレー、チャーハン、オムレツ、ラーメンと盛り沢山だ。その後は遅くまで菊地さんと話す。若い頃のこと、学舎の話、大野ゆういちさんの話。給料の話まで。お金は大事だ。とりわけ、若くて優秀な人材を学舎に集めるためには必要だ。

4 日目。朝島津さんと希望の家へ行き、ナレットさん、アンジーと一緒に近くの屋台で朝食。その後セントラルマーケットでお買い物。一坪ほどの店舗がひしめき合って迷路のようになっており歩いているだけでも面白い。マッサージオイルとアロマ的な何かを買う。

昼食後は一人で散歩。細い路地ばかり選びながら歩いていると、道の脇に隠れるようにさらに狭い路地を発見。しばらく行くと粗末な小屋に着いた。小屋というよりあずまやの方が近い。壁も扉もない木組みの建物で、下はドブ川が流れている。

入って行くとその小屋がいくつも連結していて日本の長屋みたいに奥まで連なっている。中は結構な人がいて、ご飯を炊いている女性がいたり、泣いている子供がいたり、男が昼寝していたりする。皆こちらに気付くと鋭い視線を投げかけてくる。あまり歓迎されていないようなので退散。帰り際に 1 人の男を捕まえて話しかけてみたが、手を振ってあっちいけされてしまった。英語が通じないのか、話す気がなかったのか、外国人お断りなのか。

後で菊地さんにそのことを話してみたら、ベトナム人たちだろうとのこと。そういえば川べりで会ったおじいさんもベトナム人を嫌っていた。歴史的な因縁もあって難しい問題のようだ。

希望の家へ戻ってシャワーを浴びた後、パンニャー、ペツ、ピエンのいたずらトリオを連れてまたリバーサイドへ遊びに行く。希望の家の前でたむろしていたおじさんの一人にバイクで往復を頼む。子供 3 人大人 1 人を乗つけて走るが、これが結構楽しかった。バイク自体は小さいが、トゥクトゥクより速いし小回りも効く。子どもがしょっちゅう落っこちそうになるのでその度に引き戻したりして大騒ぎしながら走る。運転手のおじさんも大うけしていた。



せつかくの儲けを賭け事タの謝シ金  
1. 取っかきの儲けを賭け事タの謝シ金  
その上いられしたハインク事タの謝シ金  
「あんなこといらないハインク事タの謝シ金  
まい。あしたがあるさ。気にしないにしろな

王宮前の広場でハトを追っかけたり、川沿いを散歩したり、バイクで市街地をドライブしてもらったりして帰る。希望の家に着いた時、運転手のおじさんが仲間らしき男にあげたばかりの運賃 10 ドルを奪われていた。彼らはよく待機している時間にカードゲームみたいなものをしているのだが、その負け分らしい。カンボジアの男たちは賭け事が好きで、何にでも金をかける。希望の家の広場でよくやっているバレーボールでも賭け

をしていて、ナレットさんがその胴元になっていたりする。皆貧しくて遊ぶ金もなく、勤勉でもないから時間を持て余してしまうのだ。

や剣る今フ  
つそんはド  
てその金はシ  
いまもの常ス  
す。のを的ナ  
希望のケ植  
の家のム民  
の家の地  
庭です。男  
でます。と  
毎日、は  
真もち  
、ク



今日の夕食は希望の家の皆とレストラン。と言ってもいわゆるチェーン店型のファミレスだが子供たちは目一杯おしゃべりをして出掛ける。カンボジアではファミレスというのは高嶺の花なのだ。ビュッフェ形式で、男の子たちはめいめいに、女の子たちは皆一緒に取りに行くのだが、キムリンだけはお母さんの横から動かない。お母さんはこちらにウィンクなんかしてくるが、キムリンは無表情でご飯もそんなに食べない。菊地さん宅や海では笑顔も見られたが、これが通常なのだろうか。最後は皆アイスを持てるだけ持って帰る。

この時点で夜8時を過ぎて真っ暗になっていたが、子供たちはまだまだ元気。サッカーをしたり、ハンカチ落としみたいなゲームをしたり、歌ったりした後ダンスが始まった。3階の階段上のスペースで、ノンラックが照明を暗くしてラジカセでノリノリの音楽をかける。最初は男の子たちだけだったが、女の子たちも一人また一人とやってきて皆で踊り出す。これが結構格好良くて決まっている。写真を撮る度、恥ずかしがり屋のエンジーが顔を隠すのが可愛い。島津さんもノリノリで踊る。僕も負けずに踊るのだが、パンニャーとペツがすぐまとわりついてくるのでそれを振り回したり、持ち上げたりしてへとへとになった。皆もさすがに満足したようでこれでお開き。シャワーを浴びて部屋に戻る。ベッドで本を読んでいるとパンニャーがもぐり込んできた。特にいたずらをしてくるわけでもなく、ただ一緒に寝たかっただけらしい。こういうところは可愛い。

5日目。朝起きると、横にはパンニャー、それと足元にペツも寝ていた。ヘインは体を丸めてダングムシのような格好で足にくっついていて。2人を起こして一緒に朝食をとる。朝が弱いので脂っこい料理が喉を通らない。ピトゥーがこのこやってきたので食べてもらう。その横でペツと犬（希望の家にはやたら犬がいっぱいいる）と遊んでいると、チェムもやって来て日本の話などした。希望の家の子供たちとは基本的に日本語で話す。話すと言ってもキムリンとピトゥー以外はほとんど挨拶くらいしか出来ないが、こちらが言う言葉を真似てなんとか理解しようとしてくれる。レクテナやチャリヤがいれば通訳してくれるが、二人とも今は日本にいる。

その後ブラザーの家へ。菊地さんが世話人の人たちと洗濯をしていたのでお手伝い。洗濯機などはなく大きな浴槽を使っての手洗いだ。外の干し場にずらっと並べれば数時間で乾いてしまう。

洗濯が終わったらセイ君と裏庭にゴミ捨てに行く。建物の裏庭にはマンゴーの木が立ち並び、焼却炉に池が2つ、さらにその奥には畑がある。牛が放し飼いになっていて草を食み、カモが池で遊んでいる。その中を、小さな石ころを拾いながらセイ君の車椅子を押して行く。焼却炉にゴミを捨て、さらに池まで行って拾った小石を池に投げ水の波紋を楽しむ。これが彼の日課なのだ。



左中央  
・頻  
・セイ  
・嶋  
津さん、  
右・チャ  
イ君、  
左を頻  
・見り  
・心て  
・をに  
・満に  
・マンや  
・ゴの満  
・のた  
のり  
のし  
のす  
のる  
のそ  
のれ  
のた  
の嬉  
し

昼食の支援をした後、今度はチャイと木の実取り。裏庭の畑に立っている大きな木の梢にさくらんぼみたいな実が成っていて、それを長い木の棒で突ついて落とす。落とすそばからチャイが口に放り込んでいき、食べ終わるとまた取ってくれとせつつく。しばらくそうして遊んでいるうちに夕方になりこの日は終了。



ブラザーたちの宿舎に戻り、ブラザー・アニールさんに泊まる部屋を案内してもらおう。彼は修道士の中では一番の年長者で、何かと気を使ってくれるいい人だ。マザーテレサの写真が机に置いてある以外は普通の安ホテルという感じ。シャワーを浴びた後、夜のミサに同席させてもらおう。聖歌、黙想、詩句の暗唱が淡々と行われた。心が平静になる。

6 日目。朝早くアニールンさんに起こされる。ブラザーたちはシスターのところに朝の礼拝へ。まだ外が薄暗い中施設の様子を見に行く。もうあらかた皆起き出して、テレビの周りに集まっている。なんとクレヨンしんちゃんを放送していた。ひどい吹き替えでセリフも棒読みだが、大人も子供も楽しそうに見ている。



7 頃には菊地さんも来られる。壊れたブラシの柄直しを頼まれたので、朝食を子供たち

に食べさせた後さっそく取りかかる。チャイが手伝ってくれるが、それはもうまったくの善意から手伝ってくれるのだが、はっきり言って仕事が進みゃしない。どうにかこうにか修復を終え、ついでに折れたほうきの接ぎ木もする。

一旦宿舎に戻ってブラザーたちと昼食を取り、次はお勉強の時間。施設のはなれが教室になっており、そこでブラザーの一人が毎日午前と昼の 2 回子供たちと音楽をしたり、絵を描いたり、文字を教えたりしている。チャイはふざけてばかりで一向に身が入らないが、他の子供たちは結構真面目にがんばっていた。ティー君には簡単な日本語を教えた。飲みこみが早く優秀な生徒だ。後はそうじ洗濯着替え、またチャイと木の実取り

に行ったりしてこの日は終了。

宿舎に戻ってシャワーを浴びた後、自室からふと外を見ると、夕焼け空の下空き地でチャイとアンドロイが段ボールを使って遊んでいる。声を掛けると嬉しそうにおーいと返事してくれた。なんだか無性に感傷的な気分になってその光景を飽かず眺めていた。この子たちはずっとこの場所で決まった時間に決まったサイクルで暮らし続けるのだ。明日も 1 年後もおそらく何十年後も。それが良いか悪いかは分からない。人生は自分自身が決めて生きていていると思っても、実はそう自由でもないことも確かだ。草深にいる皆のことが浮かぶ。

7 日目最終日。朝のミサに参加した後、午前中施設で子供たちと過ごしてお別れ。チャイは意味が分かっているようで、服を掴んだまま離してくれない。菊地さんのバイクの後ろに乗せてもらって菊地さん宅へ。チャイは怒ってしまったのか最後は姿を見せてくれなかった。

途中、市場によってもらい反物、お菓子などを買う。昼食は、腹の具合が悪い（昨日の午後からだ。）のを気づかしてもらい玉子がゆを作ってく。ありがたいことだ。少し話などしてから部屋に戻って帰る支度を整える。カンボジアに行くと良いことの一つは菊地さんとゆっくり話せることだ。ご飯まで作ってもらえる。日本ではなかなかそんな時間も場所もない。もちろんお立場もある。

夕方、希望の家の子供たちとピザ屋でご飯を食べてお別れする。最近新しく出来たお店らしく、小綺麗な店内はお客さんで賑わっている。お値段も相応で、そのため客層は中国人系が多く、カンボジア人はあまり見かけない。

料理を待つ間、ヘインが菊地さんと僕の席のところに来てうろちょろしている。ヘインは一番年少で 5 才。菊地さんには、表情や感情が無く他の子供たちと溶け込もうしないので心配している子だと聞いていたが、今の姿を見る限り想像がつかない。希望の家にたどり着けて良かった。

最後の晚餐を終え、子供たちは希望の家に戻り、菊地さん、プロ君、キムリン、パニーに空港まで見送ってもらった。菊地さんとはまた明後日日本で会うがしばしのお別れだ。

帰りの便では、カンボジアの少年サッカーチームと一緒に、騒々しさとマナーの悪さにどっと疲れが出て、飛行機が日本に着くと連絡通路のタラップで寒さに凍えた。その足で家に帰り、シャワーを浴びて草深に向かった。さあ仕事だ。現実だ。

さてカンボジアに行ってみたいという人のために僕なりのアドバイスのようなものを。

物価は日本の5分の1から10分の1位で、屋台でご飯を食べると、1ドルでご飯と飲み物付きでお釣りが来る。通貨はリエルで4000リエル=1ドルくらい。マーケットは安いがスーパーは高い。

食べ物は他の東南アジアの国ほどスパイスは効いていないが基本的に脂っこい。現地では中飲むさとうきびジュースが最高にうまい。マンゴーもうまく安い。生水は危険。買うか、沸かして飲んだ方がよい。

値段交渉は観光地以外では特に必要はない。外国人だからといってふっかけてくることもない。逆にアンコールワットなどの観光地や観光客相手の店では、言い値の半分には値切れる。

トゥクトゥクやバイクなどの乗り物は、市内であれば距離や時間に関係なく5ドルでどこでも行ってくれる。乗れば何人乗っても良いので便利。バスやタクシーもあるが使ったことはない。電車はない。

カンボジア人の国民性についても少し。一番の特徴は、男は怠け者、女は働き者ということ。希望の家でも、昼日中から日が暮れるまで多くの男たちが集まって、手で投げるゲートボールみたいな遊びやバレーボールをしている。対して女性は勤勉でよく働く。

また人懐っこく、見知らぬ外国人であっても目が合えばニコニコ笑いかけてくれる。直情的なところもあり、怒ると暴力に訴えてくることもある。

これは国民性というよりただただ教育の問題だと思うが、希望の家でも、ブラザーの施設でも暴力を振るう姿が散見された。

治安は悪いとは感じないが、法が機能しているとは言い難く、警察もあまり見かけないし、いても袖の下を要求してきたりする。良くも悪くも典型的な発展途上の国なのだろう。

宗教は仏教徒が圧倒的に多く、日本人にも馴染みやすい。年長者に対する礼儀もあり、普段ふざけてばかりの希望の家の子供たちも、挨拶する時は真面目な顔をして合掌をしてくる。

言語はクメール語。オーケン（ありがとう）くらいしか知らない、がそれでとりあえずは十分。英語は観光地以外では通じないしフランス語も同じようなものだが、身振り手振りで何とかなる。伝えたいと思えば大抵伝わるものだ。

夜の遊びは不明。修道僧のような生活しかしていない。日中の暑さのせいもあり結構夜遅くまで皆起きてはいるが、カラオケやクラブのようなものはあまり見かけない。そういう店の前には派手な格好の女たちがずらっと並んでたむろしているし、店の数も多いが客が入っているのを見たことがない。

では、どうか1人でもカンボジアを好きになってくれることを願って。 （記・高林）

## 菊地のおすすめプノンペン観光

プノンペンのリバーサイドへ行くと、たくさんお外国人を見かけます。なんで何も無いこの街にこんなにたくさん外国人が来るのかなと考えました。日本人は観光に「明確な目的」を持って出かけます。例えば、カンボジア観光なら「アンコール遺跡」「アンコールワット・バイヨン」の見学というような、確たる観光目的です。日本国内で言えば、富士山、箱根温泉、伊豆の景観と魚料理という調子です。

ではプノンペンに何かあるかといえば、ガイドブックには「ワットプノン」「王宮」、それからそれから……。負の遺産のポルポト時代の歴史的建造物：トゥールスレン収容所跡とその処刑場跡のキリングフィールド。それと忘れちゃいけないメコン川。

でもです。悪口を言うつもりはありませんが、王宮は大したことではないし……。だって、フランスがカンボジアを植民地にし、プノンペンに都にするためにフランスが作ったものだし、ワットプノンには「ペン夫人が……」というプノンペンという街の名前の由来を語るいろいろな逸話がありますが、丘そのものは小さく上にお寺があるだけで……。よせばいいのに最近では整備して柵を作って入場料を取るようになって。これも、僕にとっては魅力のあるものではありません。

では「なぜ外国人がたくさん……」と考えると、どうも観光の持ち方、目的、過ごし方が日本人とだいぶ違うのではないかと思うのです。

また、日本人のように休暇・ホリデーの取れる日数も長いようですので、観光で過ごす内容も違って来るようです。言ってみれば、プノンペンに身を置いて、ゆっくり時間を過ごし、夕方にはメコン河畔を風に吹かれながら散歩し、街で会った他の観光客と言葉を交わして、夜はバーでお酒を飲んで時を過ごす。どうもそういう感じが観光の中心のような気がします。

ですから自国と異なる空気と街の自然の様子があればそれで十分。

やはり日本人は元来せっかちで、立てた計画には従おうとし、しかも多くの日本人は英語を話すのが苦手な手は、自由な、広がりを持った観光旅行をプノンペンで持つのは難しいかもしれませぬ。

ANA 直行便就航以来、確実にプノンペンを訪れる日本人は増えています。昨年9月1日就航間も無くの頃、私が座る100座席の部屋の埋まった席数を数えたら20隻。あれまあ、こんな状態で運行は続けられるのかと心配しました。でも、8月1日、プノンペンに戻るフライトでは、横3隻並びのシートの中央シートが埋まっているところがありました。確実にプノンペンを訪れる



手前の茶色はトンレサップ川、向こうがメコン川。乾季・3月の川の流れです。

日本人観光客は増えています。皆さんがプノンペンで楽しいひと時を過ごすことができますように。

そんな日本人の皆さんにお勧めするプノンペンのスポットは、

1・メコン川横断です。独立記念塔の通り突き当たりから出ている対岸へのフェリーボートに乗り横断するのです。料金は一人500リエル。トンレサップ川とメコン川の合流点の広い川幅を走る、日本では味わうことのできない、なかなかの気分です。川の上からはプノンペンの街が一望でき、これもいいですよ。そしてもう一つはふたつのながれのみずのいろのちがいがおもしろいです。どの季節も茶色い水はトンレサップ川、乾季のメコン川は真っ青な水です。しかし、雨季のメコン川はトンレサップ川以上に真っ茶色で、さすがに中国大陸から何千キロの流れを持つ大河の貫禄を感じます。

到着した向こう岸の船着場の街には……。何もありません。このプノンペン側との差がまた面白い。地元の、失礼ながら汚い食堂で、ポンティーコーン（アヒルの卵の茹でた、中に赤ちゃんの入っているもの）を試し食いたり、焼き魚、焼肉に舌鼓を打つのも、楽しい思い出となります。

どうしても外せない、訪れなくてはいけないポルポトの歴史を見た後、心に残ってしまった重苦しさを、このメコン川横断の観光はきつとりはらってくれるでしょう。